

-地域と大学を結ぶ- りえぞん No. 20

編集発行：武庫川女子大学 社会連携推進センター

目次

韓南大学とのオンライン交流会を実施

【日本語日本文学科】……………1P

「第7回歴史文化講座 影写技術と文字研究 ―文字の影を追う―」を開催

【歴史文化学科】……………1P

グローバル・コミュニケーション専攻の2つのゼミが合同フィールドワークを実施

【英語グローバル学科】……………2P

小学校教員を目指す学生たちに向けて、家庭科教育に活用する企業連携授業を実施

【教育学科】……………3P

心理学科の学生が、不登校の中学生支援のボランティアに委嘱された

【心理学科】……………3P

『社会を明るくする運動』尼崎中央集会のボランティアとして参加！

【社会福祉学科】……………4P

健康・スポーツ科学科中堀ゼミが真夏の「全国高校女子野球」で救護サポートと熱中症予防を展開

【健康・スポーツ科学科】……………4P

ふれあい中央カーニバル2026に参加した

【スポーツマネジメント学科】……………5P

大阪・南船場で鎌田研究室の提案によるビルリノベーションプロジェクトが始動

【生活環境学科】……………5P

廣田神社で行われたエシカルマルシェに出展

【社会情報学科】……………6P

丹波市の学校給食の新しい献立を考えるコンテストに挑戦

【食物栄養学科】……………6P

3年生がヤマキ株式会社との産学連携で、かつお節・だしを活用した新メニューを開発

【食創造科学科】……………7P

西宮北口ハウジングギャラリーで小学生向けのワークショップを開催

【建築学部】……………8P

4年生有志が「芦屋オープンガーデン2026」のパンフレット表紙とポスターを作成

【景観建築学科】……………8P

「音楽学部生によるランチタイムコンサート～Hiru-Pno. KM ーースマホを閉じる 30 分～Vol.1」を開催	【 音楽学部 】	9P
丹波篠山市で農業用水路の生きもの調査を実施	【 環境共生学科 】	9P
地域の皆さまの健康をサポート！「まちの保健室」を開催	【 看護学科 】	10P
「第 76 回姫路お城まつり」で産官学連携による SDGs ブース「古の知恵を現代のローソンで学ぶ」を出展	【 経営学科 】	11P
衣装製作などのボランティアで学外ファッションショーに参加	【 生活環境学科・社会情報学科 】	12P
健康・スポーツ科学科と食創造科学科の学科横断トータルサポートで、鳴尾高校野球部を「心・技・体」から多角的に支援	【 武庫川女子大学・兵庫県立鳴尾高等学校 】	13P
本学 OG である明石市長を招き、第 6 回「国際女性デーMUKOJO フォーラム」開催	【 女性活躍総合研究所 】	13P
新制女子大学の初期を振り返る春季展 「新制女子大学として抱いた夢と理想」を開催	【 附属総合ミュージアム】	14P
彬子女王殿下を講師に迎えたシンポジウム「女性研究者の視点が拓く日本文化の新地平」を公江記念講堂で開催	【 学院 】	14P
福岡工業大学と教育・研究・産学連携のさらなる発展を目指して包括的連携推進に関する協定を締結		15P
浜甲子園団地での産学連携による活動が都市計画学会関西支部「関西まちづくり賞・功労賞」を受賞		16P
参考資料〈持続可能な開発目標（SDGs）の詳細〉		17P

-地域と大学を結ぶ- りえぞん No. 20

編集発行：武庫川女子大学 社会連携推進センター

充実する本学の地域連携活動

本学では、社会連携における新たな取り組みが増加しており、継続的な活動も着実に展開されています。中には学部の垣根を越えた取り組みも見られます。以下に代表的な活動の概要を紹介します。

【日本語日本文学科】

韓南大学とのオンライン交流会を実施



5月26日(火)、韓南大学とのオンライン交流会を実施した。

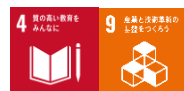
日本語日本文学科からは、3年生16名が参加し、韓南大学からは、日文学科の1年生や3年生、政治・言論学科やメディア映像学科の2・3年生、計21名が参加した。交流では、7つのブレイクアウトルームに分かれてフリートークを行い、最初は緊張が見られたが、料理や観光地、流行りのキャラクターやアーティスト、若者ことばの話など、さまざまな話題について話すうちに、徐々に打ち解けることができた。



オンライン交流会の様子

【歴史文化学科】

「第7回歴史文化講座 影写技術と文字研究 —文字の影を追う—」を開催



6月13日(土)、歴史文化学科主催(本学歴史文化学会共催)の「第7回歴史文化講座」を開催した。

今回は「影写技術と文字研究 —文字の影を追う—」をテーマに、古文書の筆跡を忠実に再現する「影写(えいしゃ)」の技術と、そこから広がる文字研究の可能性について、ディスカッションを深めた。

会場には、高校生をはじめ、大学生、地域の方々など、幅広い年代の多くの受講者の参加があった。

第一部では、「古文書を写すということ —中世の「案文」から近代の「影写」まで—」と題し、東京大学史料編纂所で筆跡・筆法研究の一環として、実際に影写業務に携わっている講師の宮崎肇氏に「古文書を写す」ということの歴史的変遷、そして影写の高度な技術の具体的な説明をして頂いた。また、筆跡研究についての最新の研究成果についても、細かな数値データをもとに分かりやすい紹介があった。活字にしてみただけでは見えにくい、古文書が持つ「文字の息遣い」や筆跡を追うことで広がる歴史研究の奥深い世界に浸ることができた。

第二部では、国立国語研究所の高田智和教授をコメンテーターに迎え、本学の井上幸准教授のコーディネートで、文字研究の視点を交えたディスカッションが行われ、活発な意見交換がなされた。専門的な知見から投げかけられる問いや解説に、参加した学生や教員、一般参加の方々から鋭い質問が相次いだ。一つの影写にかかる時間やコスト面などのこと

から、AI 等デジタル技術を見据えた今後の可能性についてなど、より具体的に影写の世界の理解を深めることができた。



案内のポスター



一般参加の方々も多く見られた

【 英語グローバル学科 】 グローバル・コミュニケーション専攻の2つの ゼミが合同フィールドワークを実施



6月13日(土)、ウィックストラム由有夏准教授ゼミと小野薫里講師ゼミが合同でフィールドワークを実施し、大阪市生野区・いくのコーライブズパーク(いくのパーク)を訪問した。

事前学習として、6月4日(木)に両ゼミ合同で授業を行い、いくのパークの活動及び生野区の歴史や多文化共生の現状について学んだ。当日は、いくのパークを運営する NPO 法人 IKUNO・多文化ふらっと代表理事の森本宮仁子先生の90分間の講義の後、いくのパーク施設内を案内していただいた。森本先生から、旧御幸森小学校を活用した施設の設立経緯

や活動内容について説明があり、在日コリアン・コミュニティの歴史的背景、外国ルーツ住民へのサポート、日本語教育や学習支援、多文化交流イベントなど、地域における多文化共生の実践について理解を深めることができた。

また、施設内のカフェや雑貨店、図書室なども見学。図書室にはさまざまな国や地域の絵本や児童書、多言語の書籍が数多く所蔵されており、学生たちは実際に本を手に取りながら、多様な文化や言語に触れられる環境を体験した。参加した学生からは、「実際に現地を訪れることで、多文化共生が地域の中でどのように実践されているのかを具体的に理解できた」「さまざまな背景を持つ人々が安心して集える場所の重要性を感じた」などの感想が寄せられた。

今回のフィールドワークを通して、学生たちは教室で学んだ知識を地域社会の実践と結び付けながら、多文化共生についてより深く考える貴重な機会を得た。



講義に耳を傾ける学生たち



施設内での見学の様子

【 教育学科 】

小学校教員を目指す学生たちに向けて、家庭科教育に活用する企業連携授業を実施



教育学科の小学校教員を目指す学生たちが家庭科教育に活用できるようにするため、雪印メグミルク株式会社(本社：東京都港区)との企業連携授業を6月2日(火)と4日(木)に「家庭科内容論」の科目で実施した。

家庭科の食領域における学びの一つとして、給食にもよく使われる乳・乳製品を食物という面のみならず文化的背景をも含めて特長等を深く知り、命をいただいているという感謝の気持ちを持って食事を楽しむことなどの意識づけにつなげるのを目的としている。

雪印メグミルクの職員からチーズの歴史の解説を聞き、その後製品の試食を通して、学生たちからは「子どものころから慣れ親しんだ味でいつ食べてもおいしい」「これまであまり注意を払ってこなかったけれどもチーズにも色々な風味があって楽しい」という声や、「チーズの歴史的な背景について詳しく知らなかったのがためになった」「牛の命の恵みをいただいているということを忘れずに感謝の気持ちを持って楽しむようにしたい」という感想があった。

吉井美奈子教授は、同社の食育チームと酪農プログラムの開発にも関わっており、6月に日本消費者教育学会関西支部の研究発表会において、共同発表を行った。



教材になった乳製品



おしゃべりタイムのような授業

【 心理学科 】

心理学科の学生が、不登校の中学生支援のボランティアに委嘱された



心理学科の3年生5人が7月30日(木)、兵庫県警生活安全部少年課西宮少年サポートセンターから不登校の中学生を支援するボランティアを委嘱された。ボランティアは、月に1回程度、西宮市内の2つの中学校で、季節のカードづくりや、ゲームなどのレクリエーションで交流するもの。

文学部1号館で開かれた委嘱式には、4人が出席。甲子園署生活安全課の安藤正樹課長から委嘱状が手渡された。安藤課長は「中学生の居場所づくりを支えるボランティア活動に参加いただき、ありがたい。年齢の近い皆さんと接することで、生徒の心も和らぐと思う。心理学科で学んだ知識を広げ、無理のない範囲で活動してください」と呼びかけた。

萱村俊哉学科長は「中学生は言葉にできない辛さや、どう表現したらよいかわからない思いがあり、皆さんに返事や反応がないかもしれないが、寄り添ってほしい。ただ一緒にいるだけで、多くのことを感じ、経験すると思います」と心構えを伝えた。

委嘱された学生の一人は、「中学生の頃、上手く話せず友人が少なかったのが、生徒の気持ちがわかるのではないかと思った。安心して過ごせるような環境づくりに協力したい」と抱負を語った。

西宮少年サポートセンターは、教員・保護者からの相談業務のほか、薬物やSNSに関する講話、繁華街でのパトロールを担っている。未成年をターゲットにした闇バイトへの誘惑や、性犯罪は後を絶たない。

不登校支援のボランティアは、生徒の孤立感を和らげようと 2023 年度から始まり、4 年目に入った。本年度は、3、4 年生 24 人が活動する。



委嘱状交付式の様子

【 社会福祉学科 】

『社会を明るくする運動』 尼崎中央集会のボランティアとして参加！



第 76 回「社会を明るくする運動～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～」(主唱：法務省)をテーマに尼崎中央集会(尼崎市)が開催された。7 月 4 日(土)、この中央集会に社会福祉学科の学生がボランティアとして参加した。

学生たちは、保護司をはじめとする更生保護ボランティアを広く知ってもらうため、松本市長や保護司会の正岡会長といっしょにパレードに参加した。

普段はあまり接することのない保護司の方とその活動内容や制度の概要について直接お話しする機会を持つことができ、参加した学生にとって更生保護について学びを深めることができた。



尼崎市保護司会の方たちと



あまがさきキューズモールの駅北側デッキ周辺での活動

【 健康・スポーツ科学科 】

健康・スポーツ科学科中堀ゼミが真夏の「全国高校女子野球」で救護サポートと熱中症予防を展開



本学と丹波市との包括連携事業として、健康・スポーツ科学科の中堀千香子准教授ゼミが、全国高等学校女子硬式野球選手権大会において救護サポートと熱中症の予防活動を実施した。この活動は、熱中症リスクの高い夏のスポーツ現場において、選手が安全に全力を発揮できる環境を科学的に支える取り組みである。

丹波市の会場に設置したブースでは、手のひらや前腕などを冷やして効率よく体温を下げる「前腕冷却」の体験や、適切な水分・塩分補給のアドバイスをを行った。また、アスレティックトレーナー(AT)を目指す学生が救護チームとして参加し、熱中症が疑われる選手や参加者への応急手当を担当した。大学で得た知識を即座に現場で活かし、実践的な「現場対応力」を磨いた。

さらに、過酷な暑さの中で試合をコントロールする審判員の身体的な負担(心拍数や体温の変化など)を測定するデータ収集も実施。今後の大会で活用できる安全な運営ルールの方策に向けて解析を進めている。

健康・スポーツ科学科では、こうした活動を通してスポーツ現場の安全性向上や地域課題の解決に寄与

するとともに、最先端の科学的知見と現場での即戦力を兼ね備えたスポーツ指導者・トレーナーの育成を目指している。



効率よく体温を下げる「前腕冷却」の様子

【 スポーツマネジメント学科 】

ふれあい中央カーニバル 2026 に参加した



5月16日(土)に開催された「神戸まつり」の中央区版「ふれあい中央カーニバル」にて、テニス&バドミントンスクール・ノア HAT 神戸校が出店した「バドミントン&テニス体験ブース」を工藤康宏教授ゼミ3年生の5名がサポートし、賑やかなブース作りに貢献した。

当日は天候にも恵まれ、5月とは思えないほどの高い気温だったが、多くの子どもたちがバドミントンとテニスを体験した。学生は、受付やシャトルとボールの球出しを行い、円滑なイベント運営をしっかりと支えた。

ゼミナールでは今後、スポーツや身体活動を通じた「子どもの居場所づくり」に取り組む予定で、今回の活動参加はその参考になる貴重な機会となった。



受付業務を担う



テニス体験の補助

【 生活環境学科 】

大阪・南船場で鎌田研究室の提案によるビルリノベーションプロジェクトが始動



鎌田誠史教授の住環境・地域デザイン研究室が提案した株式会社ワズグループの本社社屋(大阪・南船場)のリノベーションプロジェクトが正式に採用されることとなった。

このプロジェクトは、単なる建築物の改修にとどまらず、「空間の再定義 × 体験設計 × 経済循環」の実装を通じて、周辺地域全体の価値向上を目指す先進的なビジネスモデルの構築を目的としている。メインコンセプトは、本社ビルの外装を起点として「人とアートをつなぎ、新たな人の流れを生み出す」こと。建物のリノベーションをきっかけに、南船場を“訪れたくなる・歩きたくなる街”へと変革させる試みである。

学生たちは先輩から受け継いだデザインコンセプトをさらに深く掘り下げ、建物の外装およびエントランスのリノベーションデザインとして具体化させた。

鎌田教授は採用決定を受け、「研究室一丸となって取り組んだ提案が採用され、学生・教員ともに大きな喜びと達成感を分かち合っています」と話している。

2026 年度内の竣工を目指して具体的な基本・実施検討を進め、産学連携による新たな空間創造への挑戦を本格化させる。



先輩から受け継いだデザインコンセプトをさらに深く掘り下げる

【 社会情報学科 】

廣田神社で行われたエシカルマルシェに出展



和泉志穂准教授ゼミの3年生11人が5月17日(日)「ひろたのエシカルマルシェ THINK」の企画、運営に協力した。ゼミ生たちは日頃の学びを活かした4つのアクティビティを準備し、会場には多くの地域住民や子どもたちが訪れ賑わった。

和泉ゼミは数年前から継続してこのエシカルマルシェに協力しており、今回もイベントのテーマである「エシカル(環境配慮)」に着目した企画を考えた。ブース内では、印刷会社から提供された紙の端材を再利用し、来場者が環境への約束を書いた葉形の紙を貼って彩る「エシカルツリー」や同素材を使って「鯉のぼり」や「クラゲ」を制作する体験コーナーを実施した。

ワークショップでは、子どもたちが紙の「色」を選び、顔や体のデザインに没頭する様子が見られた。また、会場内4か所に設置したクイズに答えながらスタンプを重ね押ししていく『エシカルスタンプラリー』では、色が重なることで絵が浮かび上がる色彩の仕掛けを取り入れ、子どもだけでなく大人からも「面白い」と好評を博した。

さらにブースでは、化粧品 OEM 企業との共同企画による女子小学生向け日焼け止め「Kitty Blink KC UV プロテクトクリーム」を宣伝・販売した。購入したパッケージにシールやチャームをデコレーションするワークショップも行われた。

4月にゼミに配属された学生にとっては今回が初めてのイベント参加。子どもたちに楽しんでもらえるよう伝え方を工夫し、メンバー同士が協力し合って運営をやり遂げた。ゼミ生たちは「真剣に作業する子どもたちの笑顔を見ることができ、大きな達成感を得られました」と振り返り、来場者への感謝と実践的な学びの手応えを感じていた。



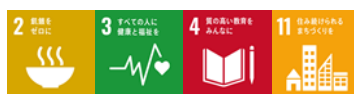
アクティビティを企画、運営した学生たち



来場者で賑わうブース

【 食物栄養学科 】

丹波市の学校給食の新しい献立を考えるコンテストに挑戦



丹波市の学校給食の新しい献立を考えるコンテストが7月23日(木)、本学の健康科学館で開かれ、脇本景子准教授と小林知未准教授の両研究室から

4年生17人が参加した。コンテストは、兵庫県信用保証協会が本学と丹波市に呼びかけ、今年初めて開催された取り組みである。同協会が、丹波市で地方卸売市場を運営する東兵庫魚菜と取引があり、旬の野菜を学校給食で活用しようと企画した。

学生は25品を考案し、そのうち9品を「主菜」「副菜」「汁物」「混ぜご飯」の4部門にエントリーした。丹波市の栄養教諭6人が審査員を務め、高評価のメニューは3学期の学校給食で提供される予定である。

献立のテーマは、丹波市産の白菜、白ネギ、青ネギ、ニンジン、大根、キャベツ、米や味噌、小豆や黒豆を使うこと。給食として提供できるかどうか、味、見た目、学生のプレゼンテーションが評価のポイント。

学生は、白菜や鶏肉を切ったり、サツマイモを炊飯器で蒸したりしながら、1品あたり10人前を手際よく調理した。「黒豆とにんじんのきな粉マヨサラダ」を作った足立紗季さんは丹波市出身で「丹波の黒豆は、ほかの産地に比べ大きくておいしいことを伝えたい。きな粉で酸味を和らげた点がポイントです」と話す。

審査員からは「冬に向けて、体を温めるメニューが多かった」「新しい発想を感じる」「大量調理の難しさに改めて気づいたのでは」といった声があがった。25品すべてに栄養教諭からのアドバイスが返され、学生は真剣な表情で耳を傾けていた。給食の献立づくりには、卵や牛乳といった食物アレルギーを持つ児童・生徒への配慮や、限られた時間で調理するため、工程の少なさも重要であることを学んだ。



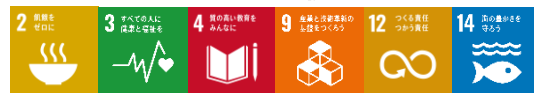
黒豆とにんじんのきな粉マヨサラダ



「モーモー根菜ごはん」調理中

【食創造科学科】

3年生がヤマキ株式会社との産学連携で、かつお節・だしを活用した新メニューを開発中



食創造科学科の3年生が、食産業界にイノベーションを起こす人材を育成するヤマキ株式会社(本社：愛媛県伊予市)との産学連携で、かつお節・だしを活用した新しいメニューの開発に取り組んでいる。

5月23日(土)には、「メニュー企画開発論」の授業にヤマキの社員の方を招き、かつお節・だしの基礎知識を学び、かつお節を削ったり、だしの飲み比べをしたりした。学生は、削りたての香りや素材による味の違いに触れ、発想を広げるきっかけを得たようだった。講義後、授業に出席した44人のうち、約9割が「かつお節やだしに対する興味・関心が大幅に高まった」と回答した。今後は、「和食×他国の食文化を融合させたフュージョン料理」をテーマにメニューを考案する。前期は、新しいメニューやアイデアの創出、後期はレシピとしての具体化、味や再現性につなげていく。レシピは、2027年にヤマキのウェブサイトを通じて公開される予定。

ヤマキは、和食の枠を超えたかつお節・だしの価値創造に取り組んでいる。食の多様化やグローバル化が進む中、若い世代の感性や発想を取り入れ、かつお節活用の可能性を広げたいと本学との連携が実現した。森京子特任教授は「学生がかつお節を自ら削り、香り立つ風味や繊細な質感を体感することができたことは、大きな学びになりました。日本の伝統的な食

文化を大切にしつつ、新しい料理表現へと発展させ、世界に継承・発信してほしい」と期待している。



初めてのかつお節削りに興味津々

【 建築学部 】

西宮北口ハウジングギャラリーで小学生向けのワークショップを開催



建築学部が、西宮北口ハウジングギャラリーで4月5日(日)、「紙管を使ったマイプレイスをつくろう」と題し、小学生と保護者を対象にワークショップを開催した。午前午後の2部制で行い、一日で60組120人が参加。

サンケイリビング新聞社が、人気企画「リビング子ども大学」の春休み版として本学の建築学部コラボレーションを呼びかけた。建築学部では、子どもたちに建築やそれを支える構造について楽しみながら知ってもらおうと強い構造のテントづくりを題材に選んだ。

建築学部の教員や、大学院生6人がサポートに当たった。最初に、教員がジャバラ状の段ボールを広げて球状の家を作るパフォーマンスを見せると子どもたちは興味津々で見入っていた。まずは4本の紙管を使って、四角形の作成に取り組み、出来上がった四角形を揺らし辺が斜めに傾くのを実演。「四角形は地震が起きると辺が斜めになって不安定になる。三角形は揺らしても辺が斜めにならないため、地震に強い」と、構造面から三角錐のテントを作る意義を説明してテント作りを始めた。

子どもたちは保護者と一緒に「マイプレイス」作りを楽しんだ。父親と参加していた小学2年の女兒

は「三角形のうちに折り紙で飾りを付けたのが楽しかった。持って帰ってお兄ちゃんと入りたい」と語り、母親と参加していた男児は「公園に持って行って友だちと一緒に入る」と話していた。

ワークショップの後は、グループに分かれてモデルハウスを見学した。大学院生が家の構造について説明し、つい先ほどまで構造力学の基礎を体験した参加者は理解を深めながら興味深そうに見学を続けた。



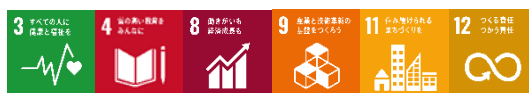
三角錐テントづくりの様子



完成例の前に

【 景観建築学科 】

4年生有志が「芦屋オープンガーデン2026」のパンフレット表紙とポスターを作成

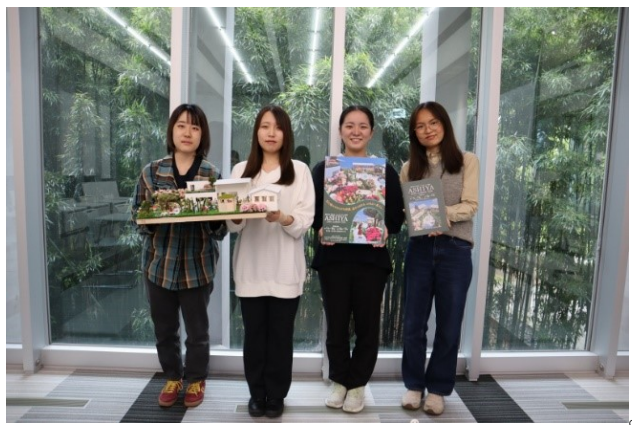


本学と芦屋市が締結する包括連携協定に基づき、景観建築学科に芦屋市都市政策部道路・公園課から「第21回 芦屋オープンガーデン2026」のパンフレット表紙、裏表紙のデザインとポスターの

作成依頼があり、景観建築学科 4 年生有志 4 人がデザインに取り組んだ。

デザインチームは、昨年 11 月から活動を開始。話し合いや試作を重ね、デザインを完成させた。建物とその周りに広がるオープンガーデンの模型を作り、それを様々な視点から写真撮影したものをデザインに取り込むことにより、花と緑あふれる多様なシーンや、花を介した人のつながりを表現している。

パンフレットは 1 万部印刷され、市内各所で配布されている。ポスターは、芦屋市広報掲示板 77 カ所で、4 月と 5 月に 2 週間ずつ掲示された。いずれも芦屋市のホームページに掲載されている。



4 年生有志のメンバー



パンフレットの表紙と裏表紙

【音楽学部】

「音楽学部生によるランチタイムコンサート～Hiru-Pno. KM ースマホを閉じる 30 分～Vol. 1」を開催



「音楽学部生によるランチタイムコンサート～Hiru-Pno. KM ースマホを閉じる 30 分～Vol. 1」をシリーズ企画の第 1 回として開催した。

会場の公江記念館には早くから開演を楽しみに待っている学生の姿があり、さらに大学見学で来学中の岡山県立岡山南高等学校の生徒の皆さんが立ち寄って演奏に耳を傾けた。

前半は馴染みのあるクラシック曲、後半はジブリやディズニーの楽曲。演奏が始まると、上階で聴いていた学生たちがスマートフォンを閉じ 1 階に降りてきて近くで聴き始める姿が多く見受けられた。

来場者から「次回も楽しみです！」という声をたくさんいただき、盛大な拍手の中一回目を終えた。



ピアノ演奏

【環境共生学科】

丹波篠山市で農業用水路の生きもの調査を実施



5 月 28 日(木)に、昨年に引き続き 2 回目の環境共生学部のフィールド・環境施設実習を兵庫県丹波篠山市の「農都のまほろば水路」で行った。

丹波篠山市は 2009 年に「丹波篠山農都宣言」をし、自然や生きものを守る持続可能な農業の普及に取り組んでいる。「農都のまほろば水路」もその一つである。

この日の実習では、市役所職員の指導のもと、多自然工法が整備された水路(まほろば水路)と土のまま

の水路の両方を調査し、それぞれ生息している種や数を把握した。学生たちは、捕獲係、保管係、仕分け係、記録係に役割分担をし、農業用水路が生きものの棲み処となっていることや、どのような水路であれば生きものが生息できるのかなどを学んだ。調査結果は、「農都のまほろば水路」の環境モニタリングデータとして市でも活用される予定である。

調査では、ヌマエビ、タナゴ、スジエビ、タニシ、オタマジャクシ、トノサマガエル、アメリカザリガニ、メダカなど、さまざまな生きものを観察することができた。

調査後は、市役所職員の方から用水路と排水路の違いや、土水路、まほろば水路、コンクリート水路のそれぞれのメリット・デメリットのレクチャーを受けた。農業用水路はお米の生産に欠かせない施設の一つだが、設置する場所や生きものが生息しやすい材料や構造を選ぶことの大切さを学ぶことができた。

丁寧に対応してくださった丹波篠山市役所の職員のみなさまに感謝申し上げる。



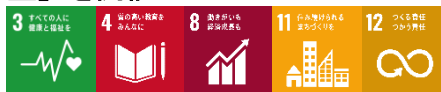
水路に踏み入れて奮闘中



捕獲した生き物の名称確認中

【 看護学科 】

地域の皆さまの健康をサポート！「まちの保健室」を開催



看護学科が8月5日(水)、三井ショッピングパークらぽーと甲子園で、「まちの保健室」を開催した。

「まちの保健室」は、地域住民の健康を支援する地域貢献活動で、会場では、看護師や保健師、助産師の免許をもつ看護学部教員が、心身の健康や子育て、生活習慣病予防、介護など様々な不安や悩みに関する相談に応じる活動である。今回は、教員をはじめ、看護学研究科の大学院生や看護学部の学部生、西宮市薬剤師会の薬剤師も参加。チーム一丸となって開催した結果、103 人もの相談者があった。

健康チェックコーナーでは、骨の健康度や血管年齢、握力を測定した。相談コーナーでは、大学院生や学部生が血圧測定を担い、教員が測定結果の説明をし健康についての相談を行った。相談者からは、「たくさんの項目を測定してもらって、参考になった」「毎回楽しみにしています」といった声があった。相談者の方からの笑顔や温かい言葉に触れ、教員・学生一同、大きなやりがいと励みを感じた1日となった。

「まちの保健室」は、看護学科が2017年7月から開催している。今年で10年を迎え、教員の学びと自己研鑽の場となっているほか、社会に貢献する学生を育成する一助となっている。2019年度からは、武庫女ステーションキャンパス(阪神鳴尾・武庫川女子大前駅高架下)で「健康相談ひろば」もスタートさせた。2022年度からは、学校教育館での「健康相談ひろば(乳幼児の計測&子育て相談)」も加わり、2025年度には「まちの保健室」と「健康相談ひろば」を計6回開催した。

看護学科では、座学だけでなく、地域住民と直接ふれあい、実践的に学べる機会が多く準備されている。今後、10月21日(水)に学校教育館で「健康相談ひろば」を開催し、子育て相談や乳幼児の身体計測、健康相談と血圧などの測定を行う予定

にしている。2027年3月には、今年度2回目となる「まちの保健室」も開催予定である。



今回初めて参加した学部生

【経営学科】

「第76回姫路お城まつり」で産官学連携によるSDGsブース「古の知恵を現代のローソンで学ぶ」を出展



この企画は、来場者に日常の買い物とSDGsとの関係を身近に感じてもらい、資源を大切にすること意識や行動の変化につなげることを目的とした取り組みである。2050年の未来社会の課題を解決し、地域再生を目指すコンビニエンスストアを構想する産学連携プロジェクト「ローソンプロジェクト」で、2026年1月に谷口浩二助教ゼミの学生がローソンに提案した内容が採用され、姫路市およびローソンの協力のもと実現した。

採用された提案を基にブースを「第76回姫路お城まつり」開催期間中の5月23日(土)、会場の大手前公園に出展した。谷口ゼミの学生25人がブースの運営に参加し、江戸時代の人々が実践していた、物を大切に使い(ゴミのリデュース)、資源を循環(リサイクル)させる暮らしの知恵を紹介した。あわせて食品ロス削減につながる「てまえどり」(店舗の商品棚の手前にある商品を選ぶ)や資源循環など、ローソンのサステナビリティへの取り組みを、クイズや展示を通じて来場者に分かりやすく伝えた。

学生たちは来場者へのアンケートを実施し、200を超える回答を得ることができた。集計済みのアン

ケート152件では、71.1%がローソン社のサステナビリティへの取り組みを「今回初めて知った」と回答し、73.0%が「ブースを通じて理解が深まった」と回答し今回の活動の意義を実感することができた。さらに、82.9%が今後「てまえどり」やリサイクルなどを実践したいと回答し、81.6%がコンビニをSDGsや環境について学ぶ場所として評価し、日々の消費行動に影響を及ぼし得ることがわかった。また、90.8%が、地域イベントで企業がSDGsを伝えることを有益であると回答した。

また、当日は外国人旅行者が立ち寄る場面もあり、日本の循環型の暮らしの知恵と、現代のコンビニエンスストアの取り組みを紹介できる機会にもなった。学生にとっても、自らの提案が来場者の気づきや行動意向につながることを実感する貴重な学びとなった。

今後は、ローソンプロジェクトで店舗出店を計画している「明石・舞子団地(明舞団地)」(神戸市・明石市)に店舗が開設された際にも、地域住民が買い物をしながらサステナビリティを学び、それを実践できる取り組みへと発展させていく予定である。今回の出展は、コンビニエンスストアを起点として、地域におけるSDGsの学びと行動を広げる可能性を示す取り組みとなった。

経営学科3年の高嶋瑠花さんは「SDGsの取り組みを日常生活の中の具体的な例を通じて多くの方に知っていただくことの大切さを実感するとともに、地域の伝統文化の大切さや人とのつながりの温かさにも直接触れることができました。この経験を通して、発信する力の重要性を学び、今後もSDGsやサステナビリティに対するの理解を広げる活動に積極的に取り組んでいきたいと感じました」と話し、また経営学科3年の中道美結さんは「ふだん私たちが学んでいることをお祭りの来場者に伝えることで、コンビニエンスストアとSDGsとの関わりを知ってもらいきっかけになって大きなやりがいと誇りを感じましたし、環境やエネルギーのことを身近な問題と考えることができるようになりました。これからも多くの方々にサステナビリティの取り組みを知っていただける

よう、学びを深めながら積極的に活動していきたいです」と語った。



ローソンの担当者と



インバウンドの観光客にも対応した

学部横断事業

【生活環境学科・社会情報学科】

衣装製作などのボランティアで学外ファッションショーに参加



「UNIVERSAL KAWAII」ファッションショー(主催：一般社団法人カワイク介護)が5月10日(日)、芦屋市のカトリック芦屋教会で開催された。ボランティアスタッフとして、本学生活環境学科1年の藤原あおいさんと社会情報学科3年の村木柚香さんが参加し、モデルのフィッティングや衣装の手直しなどを行った。ファッションショーには、2026年3月に生活環境学科を卒業した池田千春さん、山元瑞季さん、吉川乃蒼さんの卒業制作作品も登場した。

参加した藤原さんと村木さんは「衣装のフィッティングでは、見栄えのすることと歩行の容易性や車

椅子での走行のしやすさなどの配慮からサイズを調整しなければならない衣装もありました。自分が手がけた作品を着たモデルが笑顔でランウェイを歩き喝采を受けている姿を見て、もの生み出す楽しさを本当に知りました。モデルの方だけでなく、ご家族の幸せそうな様子から、このショーをとっても楽しみにされていたことが伝わり、貴重な経験となりました。ぜひ次回も参加したいです」と話した。

イベントを主催した一般社団法人カワイク介護は、「介護×障がい×LGBTなどのダイバーシティをもった社会をカワイイ・タノシイ・オイシイから相互理解する」ことを目的に、ユニバーサルデザインに関する展示・体験・販売など多彩なイベントを手がけている。代表理事の楠本あやさんが本学の卒業生であることから、生活環境学科の山本泉教授や学生がファッションショーに携わっており、本学の参加も今年で3回目となった。なお、この様子は5月13日(水)の神戸新聞朝刊でも紹介された。



祭壇を利用したステージ



お気に入りのドレスに身を包んでランウェイを進む参加者

【武庫川女子大学・兵庫県立鳴尾高等学校】
健康・スポーツ科学科と食創造科学科の学科横
断トータルサポートで、鳴尾高校野球部を
「心・技・体」から多角的に支援



本学は、高大連携事業の一環として、2025 年度から兵庫県立鳴尾高等学校硬式野球部への支援を続けている。2 シーズン目の今年度は、5 月 29 日(金)に栄養科学館で身体測定会を実施した。学科の垣根を越えて食創造科学科と健康・スポーツ科学科が協働し、測定結果の縦断的变化の解析、および個別の栄養・コンディショニング指導に臨んだ。

身体測定会では、健康・スポーツ科学科の中堀千香子准教授のゼミが、ジャンプの平均パワー、跳躍高、握力を測定。走塁、守備、投球、打撃のすべてに共通して必要とされる瞬発力や反発力、下半身の出力、上肢の基礎筋力といったフィジカル能力を把握した。同時に、食創造科学科の今村友美准教授の研究室が骨密度や推定ヘモグロビン濃度、体組成の測定と食事調査を行い、高校生アスリートの栄養状況を多角的に解析した。

これらのデータは、専用シートを用いて即座に高校生へフィードバックされ、今後は各能力の評価に応じたトレーニングや、食行動の改善提案を個別に行う。このほか、健康・スポーツ科学科の田中美吏教授(スポーツ心理学研究室)が競技力向上のための心理的スキルを中心とした指導を平素から実施しており、大学の専門知を結集して高校生の「心・技・体」をトータルにサポートしている。

身体測定会に参加した学生にとっては、測定の段取りや選手への適切な声かけ、データのフィードバックなど、想定外の事態に対応しながら専門知識を応用する貴重な学びの機会となっている。本学が高校生アスリートを支援する意義は、大学での学びを地域や次世代に還元する「生きた実践の場」の創出にある。学科横断型のトータルサポートを通じ、単なる競技力向上にとどまらず、発育・発達段階にある高校生を心身ともに健やかに次のステージへ送り

出すこと、そして社会で即戦力となる実践力豊かな学生を育成することを目指す。



データを丁寧に取っていく

【女性活躍総合研究所】

本学 OG である明石市長を招き、第 6 回「国際女性デーMUKOJO フォーラム」開催



「第 6 回 国際女性デーMUKOJO フォーラム —リーダーシップへの挑戦—」(主催：本学女性活躍総合研究所)が 3 月 14 日(土)、中央キャンパス公江記念館大講義室で開催された。

基調講演では、本学短期大学部を卒業された明石市長・丸谷聡子氏が登壇した。「ピンチはチャンス たね ～あきらめないで 道はひとつじゃない～」と題し、自身の歩みや共創社会への想いを語った。大先輩からの温かなメッセージは、教職員、学生、生徒たちにとって、未来を考える貴重な指針となった。

後半、丸谷市長も審査に加わったエッセイ・作品コンテスト審査では、中高生部門代表の附属高校 3 年生が高校生らしい瑞々しい視点で堂々とスピーチを披露。続く大学・大学院生部門では、教育学科 3 年生のグループが粘り強く制作した動画作品について、実習で培った表現力を生かして発表した。表彰式では、それぞれの努力が称えられ、会場は穏やかな拍手に包まれた。

受賞者と作品タイトルは次のとおり。

- ・中学生・高校生部門(最優秀賞)

本学附属高等学校 竹内彩恵

「それゆけ私 つかみたい未来 ーアンパンマンと私ー」

・大学生・大学院生部門(最優秀賞)

本学教育学部教育学科 岡崎有里子 清水亜美
新井麻央 樋口和梨 藤井紗冬子

「つかみたい未来 ーらしさと可能性と私ー」

・大学生・大学院生部門(優秀賞)

本学教育学部教育学科 西野友萌 本山光優希
太田結依 西本絢香 河井彩音 水田遥香

「つかみたい未来 ー死と私ー」



丸谷市長の基調講演



エッセイ・作品コンテストの受賞者たちと

【 附属総合ミュージアム 】

新制女子大学の初期を振り返る春季展 「新制女子大学として抱いた夢と理想」を開催



本学附属総合ミュージアムで4月3日(金)～6月3日(水)、2026年度春季展「新制女子大学として抱いた夢と理想」が開催された。

来年4月から、共学化という新たな変革を迎えるにあたり、「女子大学」としてのスタートラインを振り返ろうと企画された。戦後、新制女子大学が担

った大きな期待と今また新たな皆学に踏み出そうとする本学の未来を具体的な資料を通して展望する。

本学の母体である武庫川学院は1939年2月に創設。戦後、新学制が敷かれ、女子大学も大学としての設置が可能になったのを受け、1949年、新制大学の“第一期”の一つとして、武庫川学院女子大学を開学した。春季展では、現在の生活環境学部のルーツである学芸学部生活科学科と、総合大学への足掛かりとなった薬学部の資料を中心に約50点を展示。開学した昭和24(1949)年度の学生募集要項や、昭和35(1960)年度の大学要覧などの印刷物をはじめ、薬学部で使用していた顕微鏡や生薬標本、生活科学科で実習の教材として使用されたミニチュアの台所セットやかまどなどの標本の実物を、校舎の写真とともに紹介し、当時の授業風景がよみがえる構成となっている。

1962年に女子大学としていち早く開設した薬学部では、約1万点にのぼる押し葉標本を所蔵しており、葉や実のついた標本を複数展示。植物学者で、本学教授を務めた三木茂博士にちなんだメタセコイアの押し葉標本や、「三木」の名前が書かれた顕微鏡のケースなど、貴重な資料もみられる。



昭和前半期の貴重な資料

【 学院 】

彬子女王殿下を講師に迎えたシンポジウム「女性研究者の視点が拓く日本文化の新地平」を公江記念講堂で開催



本学は2月13日(金)、彬子女王殿下を講師にお迎えし、シンポジウム「女性研究者の視点が拓く日本文化の新地平」を公江記念講堂(中央キャンパス)で開催した。附属中学校、高等学校の生徒や本学学

生、教職員の計約 1600 人が参加し、司会は、本学非常勤講師でラジオパーソナリティーの塩田えみさんが務めた。

本学は、令和 5 年度文部科学省科学技術人材育成補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（女性リーダー育成型）」に採択され、女性研究者の研究力強化とリーダー育成に取り組んでおり、2023 年度からシンポジウムを毎年開催している。

女王殿下による基調講演のテーマは「日本文化を未来へ伝えるために」である。講演では、祖父の三笠宮崇仁親王殿下、父の寛仁親王殿下の影響で歴史に興味を持たれた彬子女王殿下は、学習院大学文学部史学科に進学され、スコットランド史を研究された。学習院大学卒業後に留学したオックスフォード大学マートン・カレッジでは、食堂で学生と交流し、刺激を受けられたとのこと。「日本に関する質問も受けましたが、歴史や文化について言葉に詰まることもありました」と体験を話された。「英国人は、シェイクスピアについて誰もが答えることができるのに、日本人でありながら源氏物語を外国人に説明できない」こうした体験から、「日本の代表として文化や歴史をしっかり学び、伝えたい」という思いを持たれた。

女王殿下は、講演を通じて「文化は生活の中に息づいてこそ文化である」「文化は人々の生活とともに変化し続けるものであり、その動きが止まったところで形式化し、死んでしまう。日本文化が遺物になってしまう」と日本文化継承への危機感をにじませられた。現在、子どもたちが生きた日本文化に触れるワークショップ「心游舎（しんゆうしゃ）」を主宰されており、「子どもたちの素朴な疑問から多くの気づきがある」と話された。ご自身の幼い頃の記憶が、スコットランド史研究につながったように、楽しかった記憶が、将来どこかで芽が出ればと願って活動されている。

「伝統文化というのは、一生懸命努力して守らなければいけないものではない。守りたい、残したいという思いを多くの人が無意識に持つことによって受け継がれて残っていく。伝統文化とは何か、日本

文化とは何か。手渡していく相手は誰なのか、を考えるきっかけになっていけば幸いです」と締めくくられ、講堂は盛大な拍手に包まれた。講演後、彬子女王殿下は、上甲子園キャンパスの甲子園会館に向かわれ、祖父の三笠宮崇仁親王殿下お手植えの松や、大河原量理事長や高橋享子学長、建築学部の岡崎甚幸学部長の解説で、昭和の名建築を見学された。



彬子女王殿下による基調講演



甲子園会館を見学される女王殿下

福岡工業大学と教育・研究・産学連携のさらなる発展を目指して包括的連携推進に関する協定を締結



本学は 2 月 27 日（金）、福岡工業大学（所在地：福岡市東区）と「包括的連携推進に関する協定」を締結した。本協定により、教育・研究における協力、人材育成、学生および教職員の交流を深め、両大学のさらなる発展を目指していく。本学中央キャンパスにて高橋享子学長と福岡工業大学の村山理一学長が締結式に出席し協定書に署名した。

高橋学長は「このたびの協定締結を大変光栄に思います。本学はこれまで女性の多様な可能性を育む教育を展開してまいりました。現在、令和 9 年度（2027 年度）の共学化へ向けた準備を進めており、福

岡工業大学様から多角的な知見をいただけることは非常に心強い限りです。本学が持つ幅広い専門性と、福岡工業大学様の強みを掛け合わせることで、多様な連携が生まれることを期待しています」と述べた。

福岡工業大学の村山理一学長は、「歴史と伝統ある武庫川女子大学様との連携は、本学にとっても大きな喜びです。本学は工学・情報工学・社会環境学の3学部を擁し、自立性・主体性・創造性を発揮できる実践型人材の養成に注力してきています。この協定を機に両学の学生・教職員が交流することで、急速に変化する社会で不可欠な『ダイバーシティを尊重し、異なる視点を理解して協働する力』が育まれることを切に願っています」と語った。

今後は、分野横断的な共同研究や学生同士の交流プログラムを具体化させ、地域・社会の発展に寄与する人材育成を推進していく。



本学高橋学長(左)と福岡工業大学村山学長(右)

浜甲子園団地での産学連携による活動が都市計画学会関西支部「関西まちづくり賞・功労賞」を受賞



浜甲子園団地で本学の各学部が継続的に展開する取り組みが、都市計画学会関西支部「関西まちづくり賞・功労賞」を受賞した。

この賞は関西のまちづくり及び都市計画の進捗、発展に著しい貢献をし、優れた成果と実績を認められた取り組みに贈られる。受賞したのは本学と浜甲子園団地デザイン協議会、UR 都市機構西日本支社、浜甲子園団地 団地再生協議会、(一般社団

法人)まちのね浜甲子園が取り組んだ「甲子園団地建替え事業における都市デザイン、コミュニティデザインのプロセスとその成果」。

本学では、18年前、生活環境学科が浜甲子園団地の空き住戸を「団地・大学交流施設」として活用し、ヨガや編み物教室等を行って、高齢化する住民の外出と交流を促す取り組みを行ったのをはじめ、音楽学部の有志学生による「浜甲カンタービレ」、薬学部「お薬相談・健康相談会」などを継続して実施している。また、同団地の建て替えに伴う「デザイン協議会 (UR・西宮市・学識経験者)」の開催、開発事業者や地域住民によるエリアマネジメント組織「まちのね浜甲子園」の立ち上げと住民による地域活動等、継続的かつ多様な取り組みが評価され、受賞につながった。

都市計画学会の会員で、「デザイン協議会」のメンバーでもある大坪明管財部アドバイザーが表彰式に出席した。大坪明アドバイザーは「本学の地域に根差した息の長い取り組みが評価されたことは、うれしい限りです。共学化することで、更に地域活動の幅が広がることを期待します」と語った。



薬学部の「お薬相談・健康相談会」

本稿の記事は本学 WEB サイトの NEWS 及び学科オリジナル HP をもとに作成しています。写真はすべて本学 WEB サイト掲載済のものです。

ご意見・ご質問等は、本館 5 階 社会連携推進課まで
担当：成田・安藤(6214)

E-mail: shakai@mukogawa-u.ac.jp

持続可能な開発目標（SDGs）の詳細

国際連合広報センターHP より引用

https://www.un.org/ja/activities/economic_social_development/sustainable_development/sustainable_development_goals/



あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる



飢餓を終わらせ、食糧安全保障および栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する



あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する



すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し生涯学習の機会を促進する



ジェンダー平等を達成し、すべての女性および女児の能力強化を行う



すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する



すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する



包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促進する



強靱（レジリエント）なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る



各国内および各国間の不平等を是正する



包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市および人間居住を実現する



持続可能な生産消費形態を確保する



気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる



持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する



陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、並びに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する。



持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する



持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する